
論 説

政治理論家ケネス・ウォルツ

——『人間・国家・戦争』の古典解釈——

西 村 邦 行

はじめに

1. ウォルツのテキスト解釈方法
2. ルソー解釈
 - (1) 解釈の焦点
 - (2) ルソーの国家像
 - (3) ルソーの国際社会像
3. スピノザおよびカントとの対比
 - (1) イメージ論の含意
 - (2) 固有な情念観
 - (3) 二元論の思想家スピノザ
 - (4) 当為の思想家カント

おわりに

はじめに

国際関係論と政治理論とを分け隔ててそれぞれを別個の領域と捉える学説史上の理解は、実証系政治学の自立とその裏返しとして起こった「政治理論の疎外」(ジョン・ガネル)とが一定の進展を経るなかで定着してきたものである。それはまた概して、思想から実証へという潮流を歓迎した人々の手によって広められたものでもある。ひるがえって、これまで長らく語り継がれてきており、また今日もなお広範に流布されている型の学説史は、単に図式

的に便利であるからというだけでその命脈を保っているわけではない。この学説史は、その原型を形作った研究者たちの本来の意図がどうであったにせよ、ある種の言説戦略に資するがゆえに支持されてきた面を有する。しかし、この学説史の一部を成すようにして描かれてきた、国際関係学史における古典派から科学派へとといった動きにしたところで、実際にはそれほど直線的に進んできたわけではなかった。同分野において主要な理論家とされてきた人々は、往々にして、西洋政治思想史上の古典を読む人々でもあり続けていた。

政治学および国際関係論の学説史に対する以上のような見方は、1990年代あたりから国際関係論の歴史が問いなおされてくると並行する形で、いくつかの経路を辿りつつ形作られてきたものである。本稿著者もまた、直近の拙稿において、政治哲学的思惟の変容という一つの潮流を背景に据えながら戦後国際関係学史の流れを素描するなかで、この系譜を引き継ごうとした。本稿は、同稿に対する補遺である¹⁾。具体的には、そこにおいてやはり政治理論家として読まれうる可能性を示唆したケネス・ウォルツを改めて個別にとりあげ、彼がどのような形で西洋政治思想の古典と向き合ったのかを検討する。

政治思想史家や政治理論家は、過去の思想をときに称えときに斥けるなかで、既存の概念が持つ意味を吟味し、あるいは自覚的に刷新しようと試みる。そうすることによって彼らは、狭くは閉じた知識産業の内部から広くは一般社会までの、少なくともいずれかの層を基礎づける意味秩序に訴えかけるの

1) 西村邦行「〈政治哲学の死〉の影で——冷戦期アメリカ国際関係論の精神史」『南山法学』44巻2号、2021年、71-121頁。また、本稿は、前後して公刊される予定となっている次の拙稿への補遺でもある。西村邦行「歴史を飼い馴らす——トゥキュディデス-マキアヴェッリ-ホップズという語り」葛谷彩/小川浩之/春名展生(編)『国際関係の系譜学』晃洋書房、2022年刊行予定。現実主義の伝統という枠組みを題材に、国際関係論における政治思想的叙述の変容を追ったのが同稿であるとすれば、本稿はその流れにおける一転機を特定の理論家に照準する形で捉えようとしたものと位置づけられる。

であり、その点において政治的な営為に参画することとなる。では、ウォルツの場合、個々の思想家についてどのような解釈を施し、それによっていかなる意味を帯びうる言説を構築したのか。これが、本稿の答えようとする問いである。

次節ではまず、ウォルツが実践したテキスト解釈の手法をめぐって、目下のところ唯一のまとまった研究と言えるジョセフ・マッケイの議論を確認する。続いて、『人間・国家・戦争』の記述を手掛かりに、ウォルツのルソー解釈を概観する。そのうえで、同書の全体において、そのルソーがスピノザおよびカントとどのような意味で対比されているのかを検討する²⁾。

1. ウォルツのテキスト解釈方法

ウォルツが展開した議論を一個の政治理論として読み解こうとする動きは、散発的な形であれば、これまでもいくらかは見られてきた³⁾。他方、ではそのウォルツが政治思想史上の古典をどのように読み解いたのかについては、まとまった考察が自覚的に行われてきたわけではない。そうしたなかには

2) 本稿で用いる『人間・国家・戦争』のテキストは、Kenneth N. Waltz, *Man, the State, and War: A Theoretical Analysis*, Columbia University Press, 2001[1959] (『人間・国家・戦争——国際政治の三つのイメージ』渡邊昭夫/岡垣知子訳、勁草書房、2013年)。以下、同書を引用する際は、MSWと略記したうえで原著頁/邦訳頁の形で参照箇所を示し、書誌情報の記載に代える。なお、同書は、ウォルツが1954年に記した博士論文を書き改めたものである。Kenneth N. Waltz, *Man, the State, and the State System in Theories of the Causes of War*, Ph.D. Dissertation, Columbia University, 1954。同論文に言及する際は、MSSと略記して頁番号を示す。なお、『人間・国家・戦争』に限らず本稿全体を通じて適用している手続きとして、引用している文献に邦訳書が存在しその該当頁を記している場合であっても、原著の書誌情報を併記している際には、その都度断わりを入れずに訳文を変更していることがある。

3) 特に次の論文集に収められたいくつかの論考を参照。Ken Booth ed., *Realism and World Politics*, Routledge, 2011。

あって、マッケイの論文は、最近現れた例外的な研究と言える⁴⁾。以下、ウォルツの古典解釈を検討に付す糸口として、まずはこのマッケイの議論を概観しておくことにしたい。

マッケイによれば、ウォルツの古典解釈方法は以下の四つの特徴をもって言い表すことができる。つまり、1) 対象とするテキストの真意を解き明かそうとするのではなく、自らが設定した特定の問題に対する回答を求めて様々な思想家のテキストを比較するものであること、2) 歴史的な文脈についての検討は差し挟まないテキスト中心主義的な解釈を志向するものであること、3) 実践的・規範的な含意よりも何かしらの説明の型を導きだすことに主たる関心を置くものであること、4) シュトラウス学派に見られるような^{エソテリック}秘教的な読みは避けてテキストの字句から読みとりうる意味に傾注するものであること、というのがそれである。そのうえでマッケイは、こうした方法の源泉を、ウォルツの指導教員であったウィリアム・T・R・フォックス、また、同じコロンビア大学の教員であったフランツ・ノイマンおよびジャスタス・バックラーに探る。しかし、結局のところ彼らの影響は限定的であると判じ、ウォルツの方法論は概して彼独自のものであると結論する。ただ、そうした独創の産物が、国際関係論において政治思想の古典が扱われる際の姿勢を規定していくことになったのだと言う。

以上の洞察は、示唆的ないし啓発的というよりは、学界内で暗黙裏に共有されていたいくつかの認識を、これまでとは別の専門用語を通じて言語化したものである。ひるがえってそれは、ウォルツの言説に対して従来の議論が投げかけてきた像を、この議論もまたある程度まで共有しているということの意味する。しかし、そうした従来の理解を改めて裏づける際、マッケイのやり方にはいくつかの問題があるように思われる。

差しあたって、未公刊史料にもあたりながらウォルツの知的源泉を辿って

4) Joseph MacKay, "Kenneth Waltz's Approach to Reading Classic Political Theory and Why It Matters," *International Theory*, Online First View, 2020, pp. 1–20, DOI: <https://doi.org/10.1017/S1752971920000524>.

いる知識社会学的な議論については、情報量には富むものの本稿の関心から外れるためここではとりあげない⁵⁾。他方、ウォルツの方法が文脈を省みないテキスト中心主義的なものであり、その方法を通じて古典に求められるものが規範的含意よりも説明の型であるという点は、ウォルツのテキストに触れた者であれば首肯しうるところだと思われる。ただ、そうした手法も、例えばマキアヴェッリからアーレントまでに見られる解釈手法とのあいだに近縁性を持つものだと論じられることにより、その具体的な内実がかえってよくわからないものにされてしまっている。また、そうして価値中立的立場を志向する姿勢は、構造主義的現実主義と呼びならわされる彼の具体的構想とも通じており、ゆえに国際関係論が傾いていきつつあった思惟のあり方を推し進めるものであったとされるが、この点にしても、既存の学説史理解を別の言い方で表現したにすぎないように思われる。加えて、このテーゼについては、具体的な論証を伴う形で説得的に展開されているとも言いがたい⁶⁾。

目下のところ例外的な研究とは言えるマッケイの論考であるが、その中身については、議論の進め方からしていくつかの難点を指摘しうる。ただ、思うに、ウォルツが展開した政治思想読解の手法がどのようなものであったかを検討するにあたって、その型を抽象的に切りだしてくるというアプローチの仕方自体に限界があるのではないだろうか。政治思想史家ないし政治理論

5) なお、この点についてマッケイは、後に大学教員となったウォルツがセイバインやウォーリンの書いたものを学生の課題に用いていた旨も記しているが、彼らがアメリカ政治理論史上に占める位置に鑑みると、この事実それ自体のみから何かしら有意義な示唆を引き出すことは難しいように思われる。同世代の政治理論家たちで、彼ら二人の著作に目を通してない（少なくともその概要を知らない）者など、そもそもいなかっただろう。MacKay, "Waltz's Approach to Reading Classic Political Theory," p. 10.

6) 付け加えるなら、テキストの表面にとどまることが、直ちに価値中立性への志向を意味するわけではない。この点は、ウォルツを批判した理論家たちが繰り返し説いてきたところでもある。例えば、後期ヴァイトゲンシュタインの思想を手掛かりに、反基礎づけ的な姿勢から普遍性について考察した次の文献を参照。Véronique Pin-Fat, *Universality, Ethics and International Relations: A Grammatical Reading*, Routledge, 2010.

家の営為がある種の政治的意味を帯びうる点は、前述したとおりである。だとすれば、ウォルツを政治理論家と見る際にも、彼の手法が——確かに今日に至るまでの国際関係論においてしばしば批判的とされてきたような——自らの関心に沿って思想家たちを区分けする類のものであったとして、そうした手法を通じて彼が何を行っていたのかを、個々の思想解釈に照らして検討することが行われてよいように思われる。マッケイもまた、今日ではよく知られているルソーの鹿狩り寓話に対する解釈など、ウォルツが行った具体的な古典読解について、わずかながらではあるけれども触れてはいる。しかし、その目的とするところはやはり、自身が見いだしたところのウォルツの方法の型を論証するうえで、その実例を示すことである⁷⁾。

2. ルソー解釈

(1) 解釈の焦点

以上のように、既存の研究においては、ウォルツを政治理論家と見る場合であっても、彼が展開した方法について、形式的な論点を整理する以上のことは為されていない。対して、本稿では、ウォルツの古典解釈それ自体を検討することとしたい。

とは言え、ウォルツが展開している個々の古典解釈をめぐって、有意味な批評を行うことが容易というわけではない。マッケイの整理それ自体は大枠として妥当なものであることを証明するかのように、個々の思想家に関するウォルツの議論は概して選択的でかつ短い。あるいはだからこそ、彼が展開した古典解釈の中身も、政治思想の観点からはそれほど省みられてこなかったとも言えるかもしれない。その点、彼の議論はそもそも古典のテキストに対する固有な解釈として捉えられるべきものなのかといった疑問にも、否定で応じうる面があるように思われる。

7) MacKay, “Waltz’s Approach to Reading Classic Political Theory,” pp. 13–14.

ただ、『人間・国家・戦争』のなかで、特に第三イメージが論じられている場面では、ウォルツの古典解釈にも一定のまとまりを認めることが可能である。また、同書の土台となった博士論文における叙述は、より多くの紙幅を割きながらその原型を提示している。そして、これらの箇所では、テキスト解釈を通した一定の政治的営為が展開されているように思われる。

そこで以下、テキストの読解に入っていくこととなるが、まずは、『人間・国家・戦争』の構造を簡単に確認しつつ、そのどこに焦点を当てるのかを明確にしておきたい。この書では、三つのイメージそれぞれについて思想史上の古典を参照しながら定義しあるいは思想史上の古典をそれら各イメージに区分けしている章と、それを受けて具体的な政治的事象も念頭に置きながらそれらイメージが持つ実践的意味を例証している章とが交互に現れる。ウォルツの古典解釈に注意を傾ける目下の作業との関係から言えば、おそらく最も独創性に欠けるのは、第二イメージに関する箇所だろう。自由主義の源としてまずホブズが触れられるのは、彼を現実主義の祖に据える神話化された見方を想起する場合には、意外との感もありうるかもしれない。ただこれも、むしろ近代国家論の系譜を語るうえで一般的な位置づけ方に沿ったものと言える。また、その後続くアダム・スミス-J・S・ミル-ウッドロウ・ウィルソンという系譜は、その対照でさらにレーニンとホブソンの帝国主義論が批判の俎上に載せられるところまで含めても、例えばE・H・カー『危機の二十年』（1939年）などを通じて既にその原型を人々が知るところとなっていた思想史叙述の亜種に見える⁸⁾。他方、ルソーを第三イメージの源泉として、第一イメージのスピノザ、第二イメージのカントと対照させた箇所には、個々の思想家に関するウォルツ固有の解釈が最もまとまった形で表れている。そもそも原型の博士論文においては、その後に関刊された書籍に比べて、各イメージの内実が個別の思想家に仮託して論じられる傾向が強

8) 当時の書評でも、ウォルツの議論が理想主義（古典的自由主義）批判と関連することを示唆するものがある。Paul Y. Hammond, "Review," *Political Science Quarterly* 75(3), 1960, p. 450.

かった。つまり、そこでは、アウグスティヌスとスピノザ、カント、ルソーのそれぞれに、ほぼ等分の紙幅が各章で割り当てられていたうえ、カントについては補論まで設けられていたのだ⁹⁾。ひるがえって、ルソーとスピノザおよびカントに関する記述には、古典解釈という作業を通じたウォルツの政治的営為を読み解く余地がある。本稿が着目するのはこれらの部分である。そのうえで、以下ではまず、ウォルツが展開したルソー解釈の中身を検討する¹⁰⁾。

(2) ルソーの国家像

ところで、スピノザ-カント-ルソーという一組の対照関係は、どのような趣旨で持ちだされてきた代物なのだろうか。ルソーについての読解へと筆を進めていくうえでも、最初にこの点を、ウォルツ自身の言葉によって確認しておこう。

これまでの章で、私たちは、国際関係をめぐる当該人物の思想が第一・第二イメージのいずれかに合致するところの、数多くの人々の推論について検討した。この章では、取り扱い方に変化を添えるために、また政治哲学では国際政治を理解するうえでの手掛かりを十分に引きだしていないことから、ジャン=ジャック・ルソー一人の政治思想に主たる焦点を置くことにする。同じ一対の理由から、第一イメージおよび第二イ

9) 芝崎厚士「ケネス・ウォルツ論序説——『人間・国家・戦争』の成立過程を中心に」『国際関係の思想史——グローバル関係研究のために』岩波書店、2015年、219頁以下も参照。

10) なお、ルソーに関する議論は、進め方においても具体的な文言においても、かなりの程度まで博士論文版の内容がそのまま『人間・国家・戦争』に反映されているため、以下でも博士論文の方には特に触れなかった。古典解釈が展開されている箇所限定するならば、両者で最も大きく異なるのは、カントについての論述である。この点については、後に触れる。

メージと比較するうえでは、ほとんどの場合、二つのイメージの型にぴったりと即した二人の哲学者に言及することにする。つまり、第一イメージについてはスピノザに、第二イメージについてはカントに、である。(MSW 161-162/151)

三つのイメージは、過去の諸思想を仕分けるところからウォルツ自身が導きだした型である。結果、それぞれのイメージは、その中核により近い思想家からより遠い思想家まで、複数の人々から成る集合として形作られているものと捉えることができる。そのうえで、「同じ一対の理由から」以下の文章はそこに込められている意図がやや不鮮明ではあるものの、各イメージの典型としてスピノザ、カント、ルソーが選びだされてきた。大まかには、これがウォルツの意図したところだろう¹¹⁾。

ではなぜ、ウォルツにとって、ルソーは第三イメージの思想家だと言えるのか。ウォルツの論証は、二段階の過程を辿る。つまり、まずは個人がいかに環境の産物であるのかを論じ、そのうえでそうした諸個人が形成するに至る国家も国家システムという環境の影響を免れない点を示す。

一段階目の議論から確認していこう。ウォルツによると、個々人のあり方を論じたルソーは、人間を環境の産物として捉えたという。同時にその結果としてルソーはまた、人間本性なるものが何か定まった形で存在しうるとの見解を否定したという。「純然たる人間本性などというものは知りがたいため、また私たちが知るところの人間本性は人の本性と彼の環境がもたらす影響の両方を反映しているため、スピノザやホブズが成したような人間本性の定義は恣意的であり、有効な社会的ないし政治的結論を導きえない」(MSW 166/155)。ひるがえって、ルソーは、モンテスキュー共々、ひとたび

11) 博士論文の方では、三者を選出したのはそれが都合がよいと個人的に見定めた結果であると述べており、他の政治哲学者のなかによりよい組合せが見つかる可能性も示唆している (MSS 17 fn.25)。未公刊文書を駆使するなどすれば、この点について、ウォルツの主観的な価値判断の根拠を探りあてることも可能かもしれないが、本稿はそのようなアプローチはとらない。

成立した社会こそが紛争を導きだしたと説いた思想家であるとされる。

ここで触れられることとなるのが、よく知られた鹿狩りの寓話である。鹿を捕まえるために協力を約した五人の人間の前に、突如ウサギが現れる。そうした状況において彼らは各々、そのウサギの方を捕まえるという自らの利益を優先させてしまい、当初の約束を裏切るという道を選びうる。その意味を読み解くウォルツは、理性を働かせる人間であればこそそのような結論に至るのだと、ゲーム理論を彷彿とさせる主張をしたうえで、ゆえに問題は人間の情念や道徳ではないのだと説く。「彼が空腹感に動機づけられていた限りで、彼の行動は情念に基づくものである。彼の長期的な利益は、協力行動がすべての参加者を利するだろうという確信を経験から打ちたてることにかかっているのだと、理性は彼に教えたであろう。しかし、ウサギを逃したなら、隣の男が持ち場を離れてそのウサギを追い、義理堅くあることの愚かしさを知るだけかもしれないということもまた、理性は彼に教えるのである」(MSW 169/157)。こうして、「貪欲さや野心が紛争の発生と深化に果たす役割を無視するわけでは決してないが」、との留保をつけながらもウォルツが結論するところ、「ルソーの分析は、人間の社会的事象において、紛争がどの程度不可避免的に現れるのかを明らかにしている」(MSW 170/158-159)。

(3) ルソーの国際社会像

以上のような理解を踏まえて、ウォルツはルソーの国際関係認識をめぐる議論へと筆を進める。続く一節では、人は自然状態を抜けだし市民状態に入ってこそ道徳的自由を獲得するという、『社会契約論』のよく知られた議論に言及が為される。ただし、人間やその集団が帯びうる道徳性よりも、そうした人間や集団が置かれる状況としての社会へ関心を傾けるウォルツにとって、この点に関する議論は重要ではない。代わって長々と論じられることになるのが、では市民政府相互間の関係についてルソーはどう考えたのか、という問いに対する解釈である。そして、真正な契約以前の(墮落した)

社会状態に準えられるべきこの環境下においては、改めて先の知見が脚光を浴びることとなるわけである。

そもそも個人と国家は類比的に捉えうるのだろうか。確かにルソーも、有機体の比喩を用いはする。「しかしルソーは、類比が大雑把なものであると警告する。個人の動機と国家の動機との一致は、偶然には起こりうることであっても、スピノザにおけるように必然として想定されるものではない」(MSW 173/161)。だとすれば、ルソーの知見は国家間関係には適用できないのではないか。いやそうではない。ルソーはむしろ、より厳密な意味で個人と国家を類比的に理解しうる道を切り拓いたのだ。前提として、「ルソーは二つの場合を区別していたと考えられる——私たちが現に出くわす国家とあるべき形につくられた国家とである」(MSW 173/161)。主権者の気ままな意志が集合体の意志と同定される前者の意味での国家ですら、有機体の比喩は限定的ながらも適用可能である。そのうえでルソーは、後者の意味での国家についても議論を展開した。そこで持ちだされてきたのが、一般意志説である。では、個々の人民集団のあいだに透明な一体性をもたらすものとされる一般意志とは、詰まるところ何なのか。それは、ウォルツに言わせると、「公共心ないし愛国心」である(MSW 174/162)。だとすれば、その後の歴史は、ルソーの洞察が持つ現代的価値を深めていくこととなった。確かにルソー自身は、「プラトンと同様、〔彼が理想とする次元での共同体の統合は〕狭く囲われた地域——すなわち都市国家——のなかでのみ可能だと考えた」(MSW 177/164、亀甲括弧内は引用者)。しかし、「近代技術が発達し、殊に輸送・通信手段へ応用されると、ルソーが必要と考えたところの方策を用いることもなくして、ルソーが思い描いたよりも広い地域にわたり、諸個人の利害はびつたり相互に補い合うものと考えられうるようになった。活動の規模は変わった。しかし、着想は変わらなかった」(MSW 177/164)。ナショナリズムの深まりとそれを可能にした技術の発達とによって、国家を諸個人一体の共同体として想定することはより容易くなったのだった。

ルソーが市民政府に何かしら道徳的なるものを見いだしていたとして、

ウォルツがその規範的含意自体を評価することはない。政治体相互の関係を考える場面において、重要となるのは、その一連の論理から立ち現れてくる集团的結束の強固さである。ウォルツに言わせれば、実にルソー自身、市民政府が持つ道徳的含意は、国際関係においては無に等しいと述べていることになる。

私たちが出くわすところの国家間関係について、スピノザやカントには見いだされない、というような事柄を、ルソーは何一つとして語りはしなかった——多くの場合において、彼はより上手に語りはしたけれども。ただ、善い国家——それはカントの法的基準に従って定義されるところのものであっても、ルソーのより包括的な基準に従って定義されるところのものであっても構わない——が数多く存在したとして、そのことによって世界は平和になるのだろうか。この問いに対し、カントは然りと答え、ルソーは否と答えた。(MSW 181/168)

個々の政治体が抱え持つ一般意志は、そこに属する人々にとっては一般意志と言えるものかもしれないが、国際社会という場に併存させられてみると、それぞれ一個の特殊意志にすぎない。結果、諸市民政府間の関係は、真正な社会契約に至る前の（墮落した）社会状態に見られる諸個人間の関係と変わるものではない。「ルソーの結論は、彼の国際関係理論の核心でもあるが、次の弁においてやや抽象的ながら正確にまとめられている——特殊なものあいだで思わぬ事故が起こるのは、偶然ではなく必然である。そしてこれは、アナキーにおいて自然発生的な調和は存在しないということを、単に別の形で言ったにすぎない」(MSW 182/168)。

最後にウォルツは、ルソーの解決策を連邦制に見たうえで、その内容にも触れている。しかし、その実践的意義をすげなく否定することで彼は、以上で確認した洞察こそがルソーの重要性を示しているのだと、改めて強調するに至る。「ルソーが推すところの解決が実践の上で弱々しいものだからといっ

て、国際的なアナーキーの結果たる戦争をめぐって彼が展開した理論的分析の持つ価値が、曇らされることとなるわけではない」(MSW 186/172)。

3. スピノザおよびカントとの対比

(1) イメージ論の含意

以上のルソー解釈は、これまで国際関係論において展開されてきた古典読解の多くにしばしば言われてきたような、恣意的なテキスト解釈の産物だと言えるだろうか。管見の限り、そうした色彩が特段に濃いとは思えない。

確かに、ルソーの最終的な処方箋を連邦制に認める点などは、テキストを参照するやり方に問題もあるだろう。『サン=ピエール師の永久平和論抜粋』および『永久平和論批判』については、どこまでがルソー自身の議論なのかしばしば問題になってきた。そのうえで、ルソーが連邦制を支持したという根拠としてウォルツの挙げている箇所が、批判に先立ってサン=ピエールの議論がまとめられている部分にすぎないというのは、スタンリー・ホフマンも当時から指摘していた¹²⁾。

とは言え、この点などにしてもやはり、解釈上の論争がありうる。そのうえで、ウォルツが引用する個々の文章の多くは、当該思想家が展開している議論の流れを閑却して抽出されたものというわけではない。むしろ、以上のルソー解釈について見る限り、それぞれのテキストがどのような議論の文脈において提示されたものかが、基本的には踏まえられているように見える。ウォルツ自身、過去の思想を単なるデータとして取捨選択しながら掘り起こしているなどというつもりは、おそらくなかっただろう。例えば、既存のマキアヴェッリ解釈に触れた彼は、その恣意性を論難しさえしている。「マキア

12) Stanley Hoffmann, "Rousseau on War and Peace," *American Political Science Review* 57(2), 1963, p.326 (「ルソーの戦争・平和論」『スタンレー・ホフマン国際政治論集』中本義彦編訳, 勁草書房, 2011年, 167頁)。

ヴェッリについては、政治哲学者のなかでも最も哲学的でなかったこともあり、彼の思想全体を繰り返し考察することを疎かにし、代わりに彼の政治的著作に軽く目を通して箴言をとりだすということを、人はやりたがるものである」(MSW 212/194)。

この点、ウォルツの解釈においては個々の思想家が置かれた文脈が省みられていないというマッケイの指摘も、必ずしもあたらないのではないと思われる。確かにウォルツは、今日の文脈主義者たちが傾けるような注意を、歴史的な背景に対して払うことはない。ただ、本稿では要約的にのみ触れた第二イメージに関わる思想家たちについての議論でもそうだったが、以上の分析においても、ルソーとモンテスキューの影響関係に触れたり、ナショナリズムの深化という19世紀の流れに重要な意味を持たせたり、あるいはその他でもルソーとカントの先後関係を念頭に置いたり、ウォルツは各テキストが置かれていた歴史的な状況を見捨てているわけではない。そうした文脈は、必要がない限り具体的な解釈のなかでは前面にでてきていないだけだと解する方が、むしろ適切であるように思われる。

にも拘わらず、ウォルツの解釈がどこか思想的な観点からの評価に馴染まないという印象を与えるのだとすれば、それはマッケイの挙げた三点目の特徴、つまり規範的含意よりも説明の型を求めるという傾きによるところが大きいに思われる。ウォルツが提示する個々の思想家の姿は、テキストが述べていないことを論じたかのように誤って象られているというよりも、その特定の面にばかり光が当てられているという意味で偏りを持っている。ただ、その点にしても、本人の認識としては、各思想家の核心部分を暫定的に特筆大書しただけだったのかもしれない。彼にはそもそも、各思想家の全体像を示す意図があったわけではない。古典に対峙する際のウォルツの姿勢を理解するうえでは、各思想家がそれぞれに代表させられているところのイメージなるものについて、彼がどう捉えていたのかを確認しておく必要があるだろう。彼の古典解釈それ自体をめぐる検討からは一時的に逸れることとなるが、以下この点について若干の考察を行っておきたい。

少なくとも『人間・国家・戦争』において、ウォルツは、第三イメージが上位互換的に第一イメージないし第二イメージよりも重要だと述べたわけではなかった¹³⁾。同書の結論部分にも明記してあるように、「イメージの流行は時間と場所で変わるが、いずれか一つのイメージで足りるなどということはない」(MSW 225/206)。問題は、「一つのイメージを強調することが、他二つのイメージを、排除することは滅多にないがしばしば歪めはする」ことで

13) 芝崎厚士が指摘するように、1954年の博士論文に比べて1959年の版の方が第三イメージを優位に置く記述に傾いてはいる。芝崎「ウォルツ論序説」226頁。ただ、相対的には確かにそのようなことが言えるとして、以下のとおり、1959年版においても各イメージの相互連関性が抹消されてしまっているわけではないし、芝崎もその点を否定しているわけではないだろう。本稿の結論において再度触れる点だが、『人間・国家・戦争』を主として第三イメージの書であるとする読みは、後の書が有することとなる影響力を背景とした、学説史的な再構成の一種ではないのだろうか。本稿著者が確認しえた同時代の14件の書評にも、『人間・国家・戦争』においてはいずれか一つのイメージに依拠することの限界が示唆されている点に注意を促したり、あるいはそうした限界を説いた点にこそウォルツの主たる功績を認めたりしているものが複数ある。Aurelius Fernandez, “Review,” *Journal of International Affairs* 14(1), 1960, p. 96; Hammond, “Review,” esp. p. 448; Bernard Hennessy, “Review,” *The Western Political Quarterly* 13(1), 1960, p. 256; Theodore Ropp, “Review,” *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 329, 1960, p. 204; Richard W. Taylor, “Review,” *Midwest Journal of Political Science* 4(2), 1960, p. 195。実に、この点では、ウォルツのイメージを分析レベルの語に置き換えたことで知られるデイヴィッド・シンガーも例外ではなかった。J. David Singer, “International Conflict: Three Levels of Analysis,” *World Politics* 12(3), 1960, esp. pp. 460–461。ただし、自身システム論の構築に勤しんでいたモートン・カプランなど、第三イメージ論としての意義を殊更に説いていた書評者がいないわけではない。Morton A. Kaplan, “Review,” *American Political Science Review* 53(4), 1959, p. 1127。なお、ウォルツが第三イメージのみを称えたのではない点を強調している、より最近の文献として、Brian C. Schmidt, “The Enduring Logic of the Three Images: Kenneth N. Waltz’s *Man, the State, and War*,” in *Classics of International Relations: Essays in Criticism and Appreciation*, eds. Henrik Bliddel, Casper Sylvest, and Peter Wilson, Routledge, 2013。また、ウォルツのイメージが分析レベルとはいかに異なるのかを論ずることで、この点を示唆しているものとして、Christopher David LaRoche and Simon Frankel Pratt, “Kenneth Waltz Is Not a Neorealist (and Why That Matters),” *European Journal of International Relations* 24(1), 2018, pp. 162 ff.

あった (MSW 227/208)。こう述べたウォルツは、第三イメージのみに注意を傾けることの弊害へと筆を進めさえするだろう。

同じ論点についてウォルツは、ルソーをめぐってまとまった議論を行う直前の箇所でも、次のように述べていた。「言うならば、三つのイメージはすべて自然の一部なのである。国際関係を理解しようとするいかなる試みにおいても、人間、国家、国家システムはあまりにも根本的なものであるため、分析者がいかに一つのイメージに傾倒しようとも、他の二つのイメージを完全に見落とすということは滅多にない。それでも、一つのイメージを強調することによって他のイメージに対する解釈が歪むことはある」(MSW 160/150)。その後の政治学においては、今日に至るまで、理論とは何かをレンズの比喻で説明されることがある。その際、ある理論を採用することの効用は、いくつかの事象を捨象することで特定の事柄について、より鮮明な像を得ることであるとされる。しかし、ウォルツがここで念頭に置いているイメージは、個々の研究者がそこまで自覚的に選択しうる代物であるようには見えない。ウォルツの自己認識において、自身がかつて展開した議論を後から再構成するといったことが、意識的にも無意識的にも遡及的に行われることはなかったと信じるのであれば、『人間・国家・戦争』の成り立ちを語った2001年版序文の叙述は、彼が説くところのイメージ概念が含み込むこうした意味合いを明確にしていると言える。

当初私は、国際政治上の諸帰結をもたらす主要な原因と考えられるものの所在を定めるのに、「分析レベル」という語を用いていた。しかし、妻は、より正確でエレガントな「イメージ」の語を用いるようにと、私を説得した。この語の方がより正確であるのは、レベルという観点から考えた場合、レベルの選択とは何が主題に合致したり自身の好みに適ったりしそうかの問題にすぎない、という考えに容易く滑り落ちてしまうからである。……「イメージ」という語は、頭の中に像を想い描くことを意味する。つまり、ある定まったやり方で世界を見るということであ

る。「イメージ」が適切な語であるのは、どれほど懸命に見ようとしたところで国際政治を直接「見る」ことはできないからであり、また、理論を構築するという事は妥当な活動領域を描くことを要求するものだからである。「イメージ」という語を用いることは、国際上の諸帰結を説明するうえで、根本的と思われる要素に重きを置くために自らの視野から取り除かねばならない要素があることを示唆するのである。(MSW ix/5)

ウォルツが言うイメージは、ウォルター・リップマンがステレオタイプと呼んだものとも似て、人が否応なくその視界にかけてしまうある種のフィルターのようなものだと言ってよいかもしれない¹⁴⁾。

以上を踏まえて、古典解釈の妥当性をめぐる問題に戻るとしよう。ウォルツの見るところにおいて、スピノザ、カント、ルソーが各イメージを代表するというのも、イメージなる概念が以上のような意味を帯びさせられたうえでのことだったはずである。だとすれば、各イメージに分類された思想家が、それだけ一面的な形で言い表されることになるというのは、ウォルツも自覚していた問題だと言える。結果、各思想家についての論述は、その全体像が歪められているとの印象を与えうる。ただ、ウォルツとしては、そうした一面を炙りだしてくる過程自体がテキスト解釈の手法に照らして適切で

14) 『人間・国家・戦争』が書かれた当時においても、リップマンはアメリカにおいてなお著名なジャーナリストであった。また、フォックスも参加していたロックフェラー財団の国際理論研究プロジェクトとの人的な次元でのつながりを考えると、ウォルツがリップマンの議論に自らの理論研究に対する示唆を見いだしていたとしても不思議ではなかったし、後の『対外政策と国内政治』(1967年)だと、批判的な形においてではあるものの、実際にリップマンへの言及がある。加えて、リップマンの議論を基礎とした論考であり、その名も『イメージ (*The Image*)』と題されたダニエル・ブーアスティンの書は、『人間・国家・戦争』と前後して刊行され世に知れわたることとなるだろう。以上の文脈に鑑みた場合、ここでリップマンの名を持ち出すという判断は、あくまで間接的な状況証拠に基づくものにすぎないとは言え、突飛とまでは言えないと思われる。

あったならば、各思想家をそれぞれのイメージに着目した人々であると述べても、彼らの思想を単純化したり歪めたりすることにはならないと考えたのかもしれない。結局のところ、ウォルツ自身に言わせても、単一のイメージのみに着目した思想家などというものは存在しないのである。したがって、最後には彼も、各イメージの関連性について論じることを忘れない。「これまでの章で私たちが考察してきた人々は、完全に一つのイメージから著作を行ったのではなかった。私たちがここまで強調度合いの違いからくる結果を扱ってきたことで、これまでの章は複雑になったが、おかげでいまや、いずれのイメージも歪めることなく各イメージがいかに相互に関連させられうるかを示唆する作業は、いくらか簡単になった」(MSW 230/210)。イメージが以上のようなものである以上、この引用でも触れられているように、各イメージ同士は必ずしも排他的な関係に立つのではなく相互に補完的でもある。この点については、ルソーを論ずるなかにおいても何度か注意が向けられたうえで (MSW 170/158, 183/169)、結論部においては明示的に議論の俎上に載せられることとなるのである¹⁵⁾。

-
- 15) 一つの視点に囚われることを忌避する姿勢は、同時期に書かれた別の論考でも打ちだされている。「政治哲学と国際関係研究」と題された同論文は、実際にはその題名が伝えるほどに政治哲学それ自体について述べておらず、むしろそれが収められた書全体の趣旨に相応しく、理論の功罪ないしは理論構築をめぐる留意点を扱っているとも言える。そこでウォルツは、(国際関係)研究一般における自己批判精神の欠如を戒め、ホワイトヘッドの議論も引き合いに、コペルニクス-ガリレオ-ニュートンの世界像 (the Copernican-Galilean-Newtonian image of the world) が近代の化学と生物学にいかなるバイアスを持ち込んだかを指摘する。そのうえで、ウォルツは、社会の分析においても特定の着想がいかに人々の視点を固定するものであるかを論じ、そうした着想を精査することに政治哲学が貢献しうることを説くのであるが、この部分のいくらかは、『人間・国家・戦争』の第1章においてほぼそのまま再録されている。Kenneth N. Waltz, "Political Philosophy and the Study of International Relations," in *Theoretical Aspects of International Relations*, ed. William T. R. Fox, University of Notre Dame Press, 1959, esp. pp. 58-59. 国際社会の構造に目を向けたウォルツが、ゆえに世界を構造的なものに条件づけられたものとして捉える視点を有していたことは当然であるが、そうした構造的なものへの理解は、彼が持ちだしたイメージという概念自体に埋め込まれていたように思われる。『国際政治の理論』になる

ひるがえって、ウォルツの古典解釈が何かしらの政治的な意味を帯びたとすれば、それは部分として間違っているわけではない個々の解釈が独立のものとしてその意義を強調された場合の、その特異性に認められるものと思われる。そして、スピノザ-カント-ルソーといった形で思想家たちが相互に比較されるに至ると、そうした特異性はなお一層増幅させられることとなる。以下では、スピノザとカントがそれぞれどのような意味でルソーと対比されているのかを、より詳しく見ていくことにしたい。

(2) 固有な情念観

三名の対比に関する検討へと進むに先立ち、前節で見たルソー解釈が持つ特異性を確認しておこう。以下の議論との関係では、特に一般意志説に関わる部分の論法が注目されてよい。というのも、先述のようにウォルツは、国際関係をめぐる文脈においては一般意志を愛国心と同定したうえで、実質的にはナショナリズムと同一視している。そのうえでウォルツはルソー解釈から逸れて、カールトン・ヘイズとハンス・コーンのそれぞれが提示する、歴史的な視座からのナショナリズム論にも言及しているのである (MSW 176-177/163-164)。しかし、そうして排他的な形をとるに至った殊更に近代的な型の忠誠心を問題にすると、ウォルツが見ているところの愛国心は、ルソーが一般意志と結びつけたものの墮落形態とでも言うべき代物を意味してしまっているのではないだろうか。

実に、ウォルツの解釈においては、自己愛 (amour de soi) と自尊心 (amour-propre) の区別に関する言及が一切為されない。ルソーはあくまで第三イメージの典型であると考えられるウォルツにとってみれば、個人の情念の質などというものが特段の重要性を持たないことは当然かもしれない。実際のところ、

と、レヴィ=ストロースへの言及も (議論のうえで大きな重要性を持つわけではないもの) 見られるのは、その後も彼が、構造的なものを表現するためのよりよい語彙を模索し続けていた結果ではないだろうか。

ろ、ルソーが国家間関係において戦争を不可避と捉えたこと自体を示すうえにおいて、この区別は必ずしも重要というわけでもない。自然状態とは異なり、国家の他には国家しかないという外部なき仕組みのなかにあつて、愛国心が自己愛のそれであろうと自尊心のそれであろうと必然に戦争は起こるのだという洞察は、今日の読み手たちもまた、ルソーのテキストから導きだしているところである¹⁶⁾。

ただ、他方で、ウォルツの議論が一見すると一貫していないようにも映るのは、そうして情念の内実には踏み込まないにも拘わらず、国家が有機体の比喩で捉えられうることを長々と説いている点である。そうして、ルソーの思想が持つ国際政治論としての含意を、その自然状態とそれに続く社会状態についての議論から引きだしてこようとするとき、彼を第三イメージの論客として提示するという企図は、ウォルツ本人によって、その始点から、推論のあるべき手順を踏み外すという形で裏切られてしまっているようにも見える。そのうえで、しかし、このような作業は、ウォルツの論理構成において不可欠でもあった。さもないければ、鹿狩りの寓話にしても、国際関係をめぐる知見として援用しえないからである。ただ、その結果としてウォルツは、議論の実質面においても、——例えば第二次世界大戦におけるドイツとの戦いも引き合いに、一方では国家が他国に持つ敵対心と個人の憎悪感情とは別であるといった留保を付しながらも——国家のまとまりを保つ要因の重要な部分を人間の感情に帰すという形で、第三イメージを第一イメージおよび第二イメージと融合させてしまっている¹⁷⁾。

16) ブレーズ・バコフェン「戦争の諸理由、戦争における理性——『戦争法の諸原理』のひとつの読解」『ルソーの戦争/平和論——『戦争法の諸原理』と『永久平和論抜粋・批判』』ベルナルディ/シルヴェストリーニ編、永見文雄訳、勁草書房、2020年、特に155頁以下、フロラン・ゲナール「国と自己愛——ルソーの思想における戦争の理論」『ルソーの戦争/平和論』永見文雄訳、特に226頁以下。

17) ナショナリズムを軸としてまとまりを帯びるに至った国家間の関係においてこそ戦争が避けがたいものとなったというこの視座は、実のところ、政治神学的に基礎づけられた権威への憧憬を抱いていたモーゲンソーらの世代が、本稿でも後にわずかに触れている「アウグスティヌスのモーメント」を画するなかで、ある程度共通に説いて

自然状態における人間のあり方から国家間の関係までを密接に絡み合うものと理解することは、ルソーへの迫り方としてはおそらく適切である。また、先ほど見たようなイメージ論の含意からしても、ある思想家のなかに別のイメージが顔をだしたとして、不自然だということはない。しかし、そのルソーを第三イメージの典型とすることの方に主眼があるウォルツにおいては、自らの主張の説得力を減じさせうるやり方である。そのうえで、各イメージを横断した結果も、その意味するところは不鮮明である。人間の本性に関わりなく国家間関係は戦争に至りうるとの視座をルソーに見いだすウォルツが、国家の外には国家しかないという先のような論理をルソーから汲みとっているのか、それとも特定の情念観をそこに紛れ込ませているのか、読み手の方では判別がつかないからである。非合理的なものを媒介にしてまとまった集団は、互いの互いに対する闘争を経ざるをえない——ウォルツのルソーは、むしろそう言っているだけのようにも見える。情念などというそもそも論争的な概念に関わって、そのよく知られた論点を強いて脇へ除けることや、その情念と対になるのであろう理性についても、先の鹿狩りの寓話におけるように道具的にばかり捉えていることは、こうした見方が持つ妥当性をいくらか補強するものと考えられる。

このような疑念を抱えつつウォルツの議論を俯瞰してみると、彼が個々の思想家をとりあげる際には、実のところどこでも、特定の第一イメージを論述の前提としている様子が浮かびあがってくる。次に見るように、第一イメージの典型とされるスピノザとの対比においても、この情念、あるいはそれと対比されるものとしての理性が、議論の重要な位置を占めている。そして、そこにおける情念はやはり、ルソーの場合には自尊心の方に見いだされるような、何か価値的に低次のものが想定されている。そうして諸々の情念のなかでもその特定の形態のみが念頭に置かれることによってこそ、スピノ

いたものでもある。ウォルツは、おそらく期せずして、自らが第一イメージの理論家へと分類した当の古典的現実主義者たちに歩み寄っているのであり、あるいはそれゆえにこそ、自らを現実主義の一角に立たせることにも成功しているのである。

ザが（相対的に）第一イメージの典型でありルソーが（相対的に）第三イメージの典型であるという図式も、妥当性を保ちているように見える。しかし、上述の点を改めて繰り返しておく、各イメージが個々の思想家にとっても自由に取り換え可能なものなどではなく、人が否応なく装着させられるフィルターのようなものである以上、このことはウォルツの議論に矛盾を生ぜしめるわけではない。彼の議論はむしろ、第一イメージの問題に含められるべき情念なるものについて特定の見方を共有する思想家たちをめぐり、それがもたらす問題に対する解決策の違いを明らかにするような試みであるとも解しうる。以下、この点を検討していくこととしたい。

（3）二元論の思想家スピノザ

ウォルツが描きだしているルソーとスピノザの対比は、彼が提示しているルソー解釈よりも多くの読み手に違和感を覚えさせるものかもしれない。そもそもルソー自身がスピノザに触れているテキストが限られていることを考えれば、両者を対比させるという試みから読み手の解釈を排除することは困難ではあるだろう¹⁸⁾。ただ、両者の比較を展開した箇所において特に、ウォルツの議論は、固有な主張を伴っているように見える。

社会と紛争の発生に関するルソーの叙述を追うウォルツは、先述のとおり、鹿狩りの寓話にも触れる。その解釈へと入っていくところで、ルソーはスピノザと対照される。「協力行動においては、皆が目的について合意し、その企てに同じだけの利害関心を持っているところでも、他人をあてにはできないのである。スピノザは紛争の原因を人間の不完全な理性と結びつけた。モンテスキューとルソーは、紛争の原因は人間の精神にというより社会的活動の本質に存すると説いて、スピノザの分析に対抗する」(MSW 168/157)。こ

18) ルソーがスピノザをどう受容しどう変容させたかについては、差し当たって、柴田寿子『スピノザの政治思想——デモクラシーのもうひとつの可能性』未来社、2000年、第2章。

う述べたウォルツは、ルソーもスピノザも人間の理性が完全なものであればこうした紛争が生じなかったと考えた点では同意していたとしつつ、問題の所在をさらに社会的な次元にまで移行させて捉えた点にルソーの慧眼があるとする。「協力行動を合理的、そこからのいかなる逸脱も非合理的と規定するのであれば、紛争は人間の非合理性から生ずるというスピノザに賛成しなければならない」(MSW 169/158)。しかし、鹿狩りの寓話が伝えるところによると問題は、各人が他者の協働を信じるか否かである。「ウサギを狩ろうとする人の振舞いを善と呼ぶことも悪と呼ぶことも拒む点で、ルソーはスピノザに同意するものの、スピノザとは違って彼は、それを合理的と呼ぶことも非合理的と呼ぶこともまた拒むのである」(MSW 170/158)。こうして紛争の原因は、個々の主体ないしは人間一般の性質に探っても詮のないことだとされる。

完全に合理的な人間の世界はいかなる不和も紛争も知らないという意味において、非合理性が世界の問題すべての原因だと説くような主張は、ルソーが示唆しているように、真実だとしても無意味である。世界は完成度合いという観点からそのあり方を言い表しうるものではないので、協力・競争活動において調和に近似するものをいかにして達するかというまさに現実の問題が常に私たちとともにあるのであり、完成可能性を欠くがゆえに、それは単純に人間を変えることだけでは解決しえない問題なのである。スピノザとカントの諸前提のうち二つをないままに済ませてしまうことを、ルソーはとっくに可能にしてしまっていた。紛争が社会における競争と協力の試みとの副産物であるとすれば、自己保存が人間の唯一の動機だと前提する必要はない。というのも、紛争は、いかなる目的を追求することからも生ずるのだから——たとえそのような追求を為すにあたり、カントの定言命法に従って行動しようとしたとしても。(MSW 170-171/159)

人間本性とはどのようなものをめぐる議論は神学論争の様相を呈する、ゆえにより客観的に是非を問うる対象へと目が向けられるようになった——古典的理論から科学的理論への流れをこのように解する学説史観に慣れた研究者であれば、以上のような結論に新奇な点は見当たらないのかもしれない。しかし、ここに示されているのは、社会科学における方法論上の考慮——これ自体がひとつのイデオロギーを表明したという以上のものではないが——に還元しきることのできない特定の世界像だろう。一連の解釈を通じて明確に強調されているのが世界と人間の完成不可能性であること、そのような主張がスピノザとカントを斥けルソーを評価するという形で提示されていること、これらの点は特異だと言うべきである。

結局のところ、ウォルツにとって、スピノザとはいかなる思想家だったのだろうか。今日、現実主義の伝統が説かれる際に、スピノザが触れられることはそれほど多くはない。しかし、古典的現実主義者たちが概してスピノザから示唆を得ていたことからすると¹⁹⁾、かの思想家をウォルツがとりあげたこと自体は不思議ではない。ただ、第一イメージそれ自体について語る文脈でのウォルツは、そのスピノザをアウグスティヌス、ラインホルド・ニーバー、ハンス・モーゲンソーと並列させながら議論を進めている。曰く、ニーバーによれば、不完全な生き物としての人間には限界が存在するが、にも拘わらずむしろそれゆえに、人間はその限界を克服し自己が絶対的なもの

19) この点については例えば、河村厚「スピノザと現実主義国際政治学」『季報 唯物論研究』第123号、2013年、74–91頁、Seán Molloy, “Spinoza, Carr, and the Ethics of *The Twenty Years’ Crisis*,” *Review of International Studies* 39(2), 2013, pp. 251–271. こうした系譜は少なくともさらにもう少し遡ることが可能だろう。『危機の二十年』より前に刊行された次の文献では、マキアヴェッリとホブズに連なる思想家としてスピノザの名が触れられており、ハーシュ・ラウターバクト1927年のスピノザ論へと注目が促されている。Frank M. Russell, *Theories of International Relations*, Appleton-Century-Crofts, 1936, p. 159. さらに、この1927年の論考を手掛かりに推察を行うと、全集の整理などスピノザ研究のための環境整備が19世紀末から1920年代にかけて進んでいったのに対し、彼の名はその当初から国際関係論の世界にも入り込むことになったという可能性を指摘しうる。

なのだと確証しようとする。ところで、「この見方はもちろん、ニーバーよりもずっと古い。キリスト教の伝統のなかでは、聖アウグスティヌスによって古典的な言葉で述べられている。その伝統の外では、スピノザの哲学において練りあげられている。20世紀の政治的著作のなかでは、ハンス・モーゲンソーの作品において最も明確に一貫性をもって省みられている」(MSW 21/31-32)。

こうしてアウグスティヌス、ニーバー、モーゲンソーが選ばれたのは、今日「アウグスティヌス的モーメント」とも呼ばれる、当時の国際政治理論を取り巻いていた文脈を意識したうえでのことだったのかもしれない²⁰⁾。先行する世代の国際政治学者たちを斥けようとする際に、彼らが挙って好意的にとりあげた原罪説の政治神学者アウグスティヌスは、便利なアイコンとして機能したに違いない。

その意味でも、彼ら三名を結びつけて扱うことには妥当性があったと言える。ただ、ひるがえって、ウォルツが描いている限りにおいても、アウグスティヌスらとスピノザとのあいだには微妙な差異がある。上の引用に続く箇所では、そのアウグスティヌスとスピノザに光があてられていくこととなるわけだが、そこでは両者の違いが繰り返し挙げられる。「自己保存の欲求は、アウグスティヌスの場合、観察された事実である。それは、人間の行動全体を説明するのに十分な原理ではない。しかし、スピノザにとっては、あらゆる行動の目的は行為者の自己保存である」(MSW 22/32, 強調は原文)。ただ、スピノザにおいては、まさにその結果、他者との分業と協業が始まるのだとして、それはあくまで理性に沿った理想的な行動様式が見られた場合のことであるという。原罪説をとるアウグスティヌスの場合には、そもそも人間の理性自体が欠陥を抱えている。他方、スピノザの場合、こうした理想と

20) Roger Epp, "The 'Augustinian Moment' in International Relations: Niebuhr, Butterfield, Wight and the Reclaiming of a Tradition," *International Politics Research Paper* 10, Department of International Politics, University College of Wales, 1991, pp. 1-27. また, Nicolas Guilhot, *After the Enlightenment: Political Realism and International Relations in the Mid-Twentieth Century*, Cambridge University Press, 2017.

実際に紛争を生きる現実との差異は、理性と感情との緊張関係という形で説明されなければならない。「政治的・社会的な害悪に関するスピノザの説明は、彼が理性と感情のあいだに探りあてている葛藤に基づいている。聖アウグスティヌス、ニーバー、モーゲンソーは、スピノザの思想における明白な二元論を拒否する」(MSW 24/33-34)。

しばしば汎神論的自然観という言葉で言い表されるように、スピノザの哲学は、万物を神の変状として説明するものであり、必然性との合致にこそ自由を見いだすものであるといった説明が為される。この見方が妥当であるとするならば、彼の立場を二元論的と呼び、感情に基づく大衆の動きを人間の理想的なあり方からの逸脱と捉えたものであるかのように説くウォルツの解釈は、控え目に言っても論争的である²¹⁾。そこでは、感情なるものとして、喜びや愛ではなく悲しみや憎しみのみが想定されているように見えるし、さらに言えば感情それ自体が、一方では受動的でしかありえず他方ではあるべき自然に反するものとして位置づけられているようでもある²²⁾。ひるがえつ

21) スピノザ哲学に対するこのような見立ては、博士論文から基本的が変わっていない。後に見るカントの場合と異なり、スピノザについての叙述は、『人間・国家・戦争』だと確かに圧縮されているものの、冗長な箇所や第一イメージ論からはみだす箇所を削ったというのが主たる変更であるように思われるのであり、二元論の理論家というその前提を成す思想家像は殊更に修正されていない。むしろ、アウグスティヌスも同じく二元論であるとされ、また非合理性 (irrationality) の語が繰り返し使用されることで、理性と情念の対立こそが第一イメージ論の骨格であるという論調は、博士論文においてこそ、より一層強く表れている面がある。例えば、次のような文言。「アウグスティヌスとスピノザによると、情念は理性を曇らせる。結果として、人間は、自己利益を考えれば完全に調和を保って互いに協力すべきなのに、不断に口論をして物理的暴力に訴える。もし人間が完全に合理的であったなら、彼らはいかなる問題に対しても最良の実践しうる解決を導きだし、それに従うであろう」(MSS 50)。

22) スピノザ哲学における感情の意味について、こうした批判の裏づけとなりうる文献を、強いて『人間・国家・戦争』およびその原型となった博士論文が執筆される以前の概説書から挙げておくと、スチュアート・ハンブシャー『スピノザ』中尾隆司訳、行路社、1979年(原著は1951年)、111頁以下。より最近のものでは、スピノザの感情概念をその政治思想的含意との関わりから論じた次の論考が参考になる。川添美央子「スピノザにおける感情と社会形成」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』25号

て、そうした感情と対を成すものとして捉えられている理性もやはり、それ自体として善であるというよりは、何かしらの善をもたらす手段ないし道具へと矮小化されているように思われる。『人間・国家・戦争』と博士論文のいずれにおいても、コナトゥスには——少なくとも固有名詞としては——触れられることがない。論争的な概念に対して暗に特定の意味を帯びさせながら議論を進めることによって、その論争性を覆い隠す——こうした非政治的志向が、ウォルツの手法をしばしば特徴づけているように見える。

繰り返すように、ウォルツの古典解釈がいかに誤っているかを剔抉するなどといったことが、本稿の目指すところではない。それは、例えばトゥキディデスの読み方を争ってきた1990年代以降の国際関係論と同じ轍を踏む作業であるように思われる。また、差し当たって問題となっているスピノザの哲学に関して言うと、その真正な解釈を提示するなどといった能力は本稿著者にはそもそもない。

ただ、ウォルツの解釈が何を目指したものを明らかにするうえでも、その偏りを確認しておくことは無駄ではないだろう。この点、ウォルツの議論は非合理的なものとしての戦争と対照される形で目的合理的に動く個人を暗黙の土台としている、というリチャード・アシュリーの指摘には、改めて耳が傾けられてよいものと思われる²³⁾。ちょうどこの理解に沿うように、ウォルツが第一イメージについて語る際、人間は理性的であることによってこそより善き生を生きうるとの前提がまずあり、ゆえに紛争といった悪しき生のある方を導く非合理性を人間の本性と見た（と彼が捉えたところの）思想家がそこでとりあげられている。以上で確認した彼の解釈についても、だからこそ、スピノザの言う感情が理性と対比される非合理的なものとして捉えられたうえで、前者に対する後者の価値的優位が打ちたてられているのであ

(2014年)、15–35頁。この他では、柴田『スピノザの政治思想』第3章2節。

23) Richard K. Ashley, “Living on Border Lines: Man, Poststructuralism, and War,” in *International/Intertextual Relations: Postmodern Readings of World Politics*, eds. James Der Derian and Michael J. Shapiro, Lexington Books, 1989, pp. 285 ff.

て、そこに読解の偏りが生まれているのだという推論が成り立ちうる。ひるがえって、そのスピノザと対照されることでこそルソーも、合理性か非合理性かといった二元的対立を超えた存在として提示されることとなる——理性と情念のあいだにより深刻な葛藤を抱えていたのは、スピノザよりもむしろルソーの方だったのではないかという解釈も（あるいはそうした解釈の方が）、十分に説得的でありうるのだとしても。

つまり、ここでも情念は、善きものとしての理性に対置される何か悪しきものとして観念されている嫌いがあるわけである。そして、もしこのような解釈が妥当だとすれば、ウォルツの第三イメージ論（あるいは彼の議論の全篇）には、アシュリーも示唆しているように、特定の第一イメージが滑り込まされているということになる。ひるがえって、おそらくはそれぞれ質的に異なるものが想定されている、アウグスティヌスが言うところの戦争からルソーが言うところの戦争までを、同じ戦争という語彙で語ることもまた、そこでこそ可能となっているのだと考える。先のルソーについての論述でも、ウォルツは、存在の次元の議論と当為の次元の議論とを切り分けながら解釈を展開しようとしていたが、同じ二分法がスピノザにおいても現れているのはおそらく偶然ではない。極めて繊細な形においてはあがあるが、ウォルツは常に、当為の次元に関する問題を自らの議論から削ぎ落としていこうとする。結果、没価値化された概念が残されることとなるのである。

こうした傾向は次のカントについても問題となるが、差し当たって目下重要なのは、ウォルツが自らの議論を推し進めていくにあたり、以上のようなスピノザ解釈がどのような意味を持ったのかである。実に、この論争的な解釈の下でこそ、ルソーと対照させるうえでスピノザの方がアウグスティヌスよりも適切だったのだと言える。ルソーを通じてウォルツが言いたかったのは、非合理性を合理性で塗り替えるという策の無意味さであった。しかし、アウグスティヌスらにおいては、両者の関係性をめぐってそもそも二元論的な理解が採用されていない。ウォルツ自身がニーバーに触れながら述べているように、（モーゲンソーに関してはかなり議論の余地があるだろうが）彼らの

場合には、愛で罪を超えるという策が代わりに提示されるのである (MSW 26/35)。こうした路線とは異なる解決を提示した思想家としてスピノザが描きだされていること自体に、ウォルツのスピノザ理解が抱える偏り、あるいは先述したような理性と感情ないし情念をめぐる特定の価値前提がうかがえるところではある——例えば、スピノザが説く愛の感情は基礎的感情としての喜びに由来するものであったとして、ウォルツがアウグスティヌスらに帰しているような性質がそこにはなかったと言えるのだろうか。ただ、理性自体に欠陥を見いだすアウグスティヌスらの論法は、やはりルソーと対照させることができない。(ウォルツが見る限りで) 理性と感情の摩擦という軸の下で前者による人間の変革を目指したスピノザであればこそ、第一イメージと第三イメージの切り分けは、より無理のない形で為しうることとなるだろう。ルソーにおいても情念が陰に重要な役割を有していたとして、それ自体は問題とならない。第一イメージ論者においても第三イメージ論者においても、実は特定の情念がその議論を下支えしているのではあるが、問題はそうした情念を理性や道徳で塗り替えることに解決策を見いだすかどうか、ウォルツにとってはこれこそが問題なのである。

(4) 当為の思想家カント

以上の論旨は、カント解釈においても現れてくることとなる。第二イメージとは何かが論じられている箇所でのカントは、名前だけは何度か文中で触れられる。しかし、ミルやウィルソンの影にあって、その思想内容についてそれほど具体的な言及が為される存在ではない。他方、議論がルソーとの対比に入ると、そのカントが前面に押しだされてくる。この理由も、以上に見たようなウォルツの思惟様式に基づくものであると思われる。というのも、『人間・国家・戦争』におけるカントは、結局のところ、理性と当為の人だからである。

同書中、ウォルツが思い浮かべているカント像は、ルソーについての叙述

に先立つ数頁にはほぼ集約されて示されている。スピノザに比べて「より複雑でより示唆的」とされるカントについての議論は、人間を「感性の世界と悟性の世界の両方に生きている」と規定した思想家であるという点から開始される (MSW 162-163/152)。そのうえで、理性とともに非合理性も抱え持つ人間は自然状態において自らの課す格率のみに沿って生きることができないこと、ゆえに市民政府が打ちたてられること、しかしそれでも国家間の関係は未だ自然状態と変わらない事態に置かれることが語られる。そこで、専制を恐れて世界政府という道はとらなかったカントが最終的に至りつくのは、「内的には諸国家の改善」、「外的には法の支配」であった (MSW 164/153)。ただ、ウォルツに言わせれば、これは結局前者のみを採用する方策であるという。「しかし、第二の要因は、自発性にかかっており、第一の要因がどれだけ完全に実現されるのかに、全面的に依存している」 (MSW 164/153)。この理解をもってウォルツは、カントを第二イメージの理論家へと分類し、その解決策が国際的には達成しえないものだと斥けるのである。

ここでもウォルツは、理性に基づいて導きだした当為が現実には達成しえないという形で、第三イメージには分類しえないと判断した思想家を脇へと追い遣る。また、(自然状態に対して)「否応なく伴う (necessary) 制約として市民政府が現れる」 (MSW 163/152) といった表現にもうかがえるように、実践理性を行使することに込められているはずの規範的な意味合いも、ここでは削ぎ落とされているように見える。いささか逆説的ながら、そうであればこそ、彼が諸国家の改善と呼ぶところの営みも、自律的な意志に基づく自由な行為というよりは、他から命じられて行う事柄という性質を帯びて、ゆえに現実から遊離した当為であるかのような印象を強めるだろう。そこにおいて、理性とはやはり、何か道具的なものである。

ところで、こうしていくらか戯画化されたカント像を打ちだす際のウォルツは、フランス語原著の全集にまであたって幅広い著作に言及しながらルソーについて分析する際、あるいは『エチカ』と『神学・政治論』の個々具体的な論述を踏まえてスピノザを論ずる際と比べても、論証手順の次元から

して粗雑な論理展開を行っている印象を受ける。事実、批判哲学に関わる部分は、『人倫の形而上学の基礎づけ』の第2章および第3章——これは結局のところ、序論と結論を除いて全3章から成る同書の大部分である——を参照するよう促されるだけで（MSW 164 fn.7/153注7）、それ以外の箇所についても、カント自身の具体的な文言はほとんど示されることがない。

後に刊行されたカントについての論文についても指摘しうる点ではあるが、批判哲学に対するウォルツの関心はそもそも、低いものにとどまったのかもしれない。そこでもやはり、三批判への具体的な言及はほとんど見られないのである。『人倫の形而上学』への言及も、——『徳論』の込み入った読解自体が当時はそもそも為されることがなかったのかもしれないが——『法論』に対するものばかりである²⁴⁾。こうした傾向には、スピノザを論じるうえでも、心身平行論についての議論が概ね閑却されていた点とのあいだに、類似性を感じさせる。テキストの表面にとどまるというマッケイの指摘が妥当する面だと言えるかもしれないが、狭義の政治思想ないし社会思想に関わる問題以外について各思想家が展開した議論は、ウォルツの関心からは逸れがちである。

ただ、『人間・国家・戦争』の偏りに関して言えば、博士論文からの変更が一つの背景ではあるだろう。先述のように、『人間・国家・戦争』の原型となった博士論文では、各思想家に関する記述のバランスが異なっていた。第一イメージに関してニーバー（とモーゲンソー）をめぐる論述が追記されたのは、上述したように当時の文脈を踏まえれば理解しうる。第二イメージに関する記述が上記の形に変化した理由は——やはり論述全体を国際関係論へより引きつけた形に整えたのだとすると、先述したカーやその先駆者たちの議論を意識した可能性もあるが——定かではない。いずれにせよ、博士論文が『人間・国家・戦争』に修正される過程で、カントについての解釈は、かなりの程度まで削ぎ落とされていったわけである。実際、博士論文の方では、

24) Kenneth N. Waltz, "Kant, Liberalism, and War," *American Political Science Review* 56(2), 1962, pp.331–340.

『実践理性批判』への言及がいくらか見られたりもする。

そのうえで、こうした修正作業は、ルソーとの対照を明確にする効果を持っただろう。確かに、博士論文においても、あるいはそれを基にして公開された後の論文においても、カントに対するウォルツの評価は基本的には同じであり、平和をめぐる彼の提案が実現不可能であるという結論で終わる。実際、博士論文と『人間・国家・戦争』との最大の違いは、カントの解決策がいかに誤っているかに関する論証の厚さであるとも言える (MSS 133ff)。また、カントが理性に与えている意味は、博士論文でもいささか歪められているように見える²⁵⁾。とは言え、とりわけ博士論文の補論においてウォルツ

25) 博士論文中的一節において、ウォルツは次のように説く。「カントの哲学は、経験論と観念論のいずれとも違い、人は理性の消極的規定に沿って行動するときのみ道徳的に行動するのだと断言する。つまり、彼が彼自身に与えた格率に基づいて行動し、その格率が、誰もが矛盾なく従うものであるときに、である。感情に従って行動することは気まぐれに行動することなのだから、また、人の理性はヌーメナを知ることができないのだから、これがカントの仮説によって排除されない唯一の解決である」(MSS 118-119)。カント自身が義務と自由のそれぞれについて論ずる際に「消極的」なる語を用いており、「消極的」なる語がその点を想起させることを踏まえると、このような規定の仕方は——カントに積極的義務論は存在しないといった解釈を展開しているのでなければ——端的に誤っているか、少なくとも不注意だと言うべきではないだろうか。しかし、ではなぜそうした危険を伴う言述が為されているのかということが問題になるが、ここでもやはり、理性と感情、観念と経験といった二項対立図式が過度に単純化される形で提示されているのであり、その結果としてこそ定言命法の意味内容も変質させられているのだと考えられるわけである。内容面でも以上の論点に関わる部分で、カントが積極的および消極的という語をどのように用いているかについては、『徳論』と『実践理性批判』のそれぞれ次の箇所を参照。「……自分自身に対する義務を、その形式的なものと実質的なものとに分ける客観的区分だけが成り立つであろう。それらのうち一方は制限的〔消極的義務〕であり、他方は拡張的〔自分自身に対する積極的義務〕である。前者は人間の本性の目的に関して、それに逆らって行為することを人間に禁止する義務であって、したがって道徳的自己保存にのみかわり、後者は恚意の一定の対象を自己の目的とすることを命ずる義務であって、自分自身の完成にかかわる。これらは二つとも不作為義務……としてか、あるいは作為義務……として、しかしいずれもともに徳の義務として、徳に属する。」「道徳性の原理の唯一の本質をなすものは、この原理が法則のいかなる実質（すなわち欲求せられた客観……）にもかかわりなく、普遍的立法という単なる形式によってのみ意

が描いていたカントは、『人間・国家・戦争』においてルソーと比較されているカントほどに一面的な思想家でもなかった。実に、平和に対する処方箋は第二イメージのそれであるとしても、「カントの分析は、第二イメージを使用するのと同じくらい第一イメージと第三イメージを用いるものである」(MSS 143)。同書中でも既に見た箇所では、ルソーもスピノザやカントとそれほど違ったことを言っていたわけではないとの言葉も記されていたが、博士論文におけるカントは、より一層(ウォルツが見るところ)現実的な視点を持った存在として描きだされていた。実に、そこでの議論を基にした先述の論文では、国家間関係の自動的な調和を信じず、ゆえに他の自由主義者からは切り離されるべき思想家として扱われていた²⁶⁾。「カントは、ある視点から読まれたならば、不健全に基礎づけられた「べき」の無益さに関する研究として捉えられうる」存在なのであり²⁷⁾、その「政治哲学を彼の道徳哲学に照らして考察することからでてくる結論は、彼のより純粋に政治的な主張の

志を規定するということである。なおこの場合に意志の格率は、かかる普遍的立法の形式をもち得ねばならない。法則の実質にまったくかわりがないということは、消極的意味における自由である。しかし純粋理性であると同時に実践的な理性が、このように自分自身に対して立法する……ということは、積極的意味における自由である。それだから道徳的法則が表現するのは、純粋実践理性の自律すなわち自由にはかならない。この自律こそ、およそ道徳の形式的条件であり、一切の格率はこの条件のもとでのみ最高の実践的法則と一致し得るのである。」カント『人倫の形而上学 第二部 徳論の形而上学的基礎』『世界の名著 32 カント』森口美都男/佐藤全弘訳、中央公論社、1972年、574頁(亀甲括弧内は原文の訳文、なお傍点および太字は省略した)、カント『実践理性批判』波多野精一/宮本和吉/篠田英雄訳、岩波書店、1979年、78頁(丸括弧内は原文の訳文、なお傍点は省略し、また格律の表記を格率に統一した)。

26) この点については、カントが世界共和国実現の可能性を否定して拡大し続ける連盟で消極的に代用しようとしたとする通説的な見解に、ウォルツは言及すらしておらず、その意味で彼が、当時台頭してきていた国家中心主義的なカント解釈に与していたという、芝崎の指摘も参照。芝崎「ウォルツ論序説」220頁。関連して、カントの国際関係思想をめぐる研究史のなかでウォルツが占める位置については、Eric S. Easley, *The War over Perpetual Peace: An Exploration into the History of a Foundational International Relations Text*, Palgrave Macmillan, 2004, pp.58-59.

27) Waltz, "Kant, Liberalism, and War," p.336.

多くによって裏づけられる」ような、空論的なところのない思想家だったのである²⁸⁾。しかし、こうしたカントも、『人間・国家・戦争』ではより単純化されている。結果、そこに現れるのは、情念の問題を理性と当為でもって解決することに失敗した思想家である。

おわりに

本稿第3節(3)で引用した『人間・国家・戦争』の文言にもあったように、ウォルツにおいては、人間の完成可能性に対する期待の有無こそが、スピノザとカントからルソーを分け隔てていた。いずれの思想家も人間がより倫理的に高い次元で生きられるあり方を模索してはいたとして、理性的な人間による理想的な世界を描いたスピノザ、現実におけるその困難に気づきつつも同様の理想へ向かおうとしたカントに比して、端から理想的な調和を放棄したルソーへとウォルツは関心を向ける。あるいは、国家間における戦争の不可避性というテーゼのなかにそうした含意を読み込みながら、ウォルツはスピノザおよびカントをルソーと対照させる。ルソーもスピノザやカントとそれほど違ったことを言ったわけではないとの留保を残しつつも、二人の思想家が国際関係の現実に対して示した洞察は——とりわけ博士論文からの変更を経た後では——脇へと遣られる。人間の内面を変えるのであれ人間集団を統率する仕組みを変えるのであれ、人為が多くを達成しうる可能性に対し、ウォルツは概ね懐疑的である。その理由は、結局のところ、人間がそれほど理性的ではないという点に集約される。ウォルツが選びだしている三名の思想家は、少なくとも彼が描きだしている限り、いずれもが人間の非合理的な情念に闘争の発端を見いだしているのである。ここに浮かびあがってくるウォルツの立場を現実主義的と言うのだとすれば、そこでの現実主義とは、理論から規範的な要素を剥ぎとろうとする傾向のことである。

ウォルツにとって最大の理解者であり批判者でもあったと思われるホフマ

28) Waltz, "Kant, Liberalism, and War," p.339. 同じ文言は、MSS 293.

ンが、自らのルソー像を提示するうえでウォルツに投げかけた疑義も、この点に関わるものだったと言える²⁹⁾。確かにホフマンは、ルソーの解決が第二イメージないしは第一イメージのレベルにあったとの指摘を行う。この際に彼は、ルソーが排他的・攻撃的なナショナリズムを重視したのではないことも、紙幅を割きながら説くこととなる³⁰⁾。他方で、ウォルツの方にしても後に、この点について反発を示す。『国際政治の理論』において、構造的なものに対するホフマンの見方を（第一イメージおよび第二イメージを起点とする）「インサイド・アウト」型の論理だと批判した彼は、ゆえにホフマンのルソー像もまた、この同じ論理に沿う形で歪められているのだと説く³¹⁾。ただ、これらの対立を、ルソーが第三イメージの論客なのかどうかのみをめぐって行われているものと捉えるのは表面的である。政治体の内部において道徳的な共同性を確立したはずの人々が、他の共同体との関係においてはむしろそれゆえにより苛烈な闘争に陥る可能性がある——一般意志に基づく市民政府を打ちたてることが道徳的な分裂状態を招き入れるというこの逆説にこそ、ホフマンの焦点はあてられていたからである。

ルソーの国際関係研究は次の疑問を提起する。つまり、「混合状態」が最悪である以上、世界においては、多くの市民社会があるよりも全く市民社会がない方がましなのではないかという疑問である。現在の状態は、墮落した自然状態よりもはるかに残忍であるだけではない。現在の状態は、——戦争の原因は従来になく市民の生活から遠いところにあるのだが——殺人が国家によって教えられる義務となってしまった状態で

29) Hoffmann, “Rousseau on War and Peace,” pp. 326 ff (邦訳 167 頁以下)。

30) これらの点について、ホフマンは後に、自らの議論のアップデート版とも言える論考でも、同じ趣旨の見解を改めて提示している。Stanley Hoffmann, “Introduction,” in *Rousseau on International Relations*, eds. Hoffmann and David P. Findler, Clarendon Press, 1991.

31) Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics*, Addison-Wesley, 1979, pp. 47–48 (『国際政治の理論』河野勝/岡垣知子訳、勁草書房、2010年、61–62頁)。

もある。道徳上の悲劇は、こうである。「ある人々と一体になることで、私たちが真に人類の敵となってしまった」。——これは人間がかつて置かれたことのない状況である。³²⁾

ひるがえって、ウォルツの議論が持った論争性の中核も、個々の古典テキストに読みとりうる規範的含意を削ぎ落としていったところにこそ認められると言える。では、ウォルツの言説は、その（少なくとも潜在的な）政治的意図を達成しえたのだろうか。必ずしもそうではなかっただろう。例えば、今日でも、（無政府的な環境における権力政治の必然性を説くものとしての）現実主義の伝統に連なる思想家としては、トゥキユディデス、マキアヴェッリ、ホップズの方が引き合いにだされることが多い。彼ら三名は、少なくともある時点から一組の存在としてとりあげられてきたがために、国際関係論や政治学において現状のような地位を持っているという面はあるが、いずれにせよルソーは彼らに比べるならややマイナーである。

この背景には、先の三名に比べてルソーの思想が（道徳的共同体の模索というその社会契約論のイメージも手伝って）権力政治のそれとして単純化しにくいといった事情もあるのかもしれない。ただ、同時代の文脈からしても後世に対する影響の持続性からしても、ルソー像としてより広く受容されていったのは、むしろホフマンによるものの方だったとは言える³³⁾。ロジャー・マスターズの議論は、学界のそうした状況を示唆する一例である。ホフマンのルソー論が現れた一年後、彼は、E・E・エヴァンズ-ブリチャードの今日では古典

32) Hoffmann, "Rousseau on War and Peace," p. 323 (邦訳 161–162 頁)。

33) 例えば、ルソーをある種の現実主義者として描きなおし、そのなかで彼を第三イメージ論から解放しようとしたマイケル・ウィリアムズの議論も、ホフマンへの言及でもって開始される。彼の議論では、途中にウォルツの名もたびたび挙げられるものの、どちらかと言えば仮想敵のような形で触れられており、その実質的な解釈内容については、それほど込み入った分析が為されているわけではない。Michael C. Williams, *The Realist Tradition and the Limits of International Relations*, Cambridge University Press, 2005, ch. 2.

的なものとなったヌー族についての研究を手掛かりとしつつ、未開社会と国際社会とを類比的に捉えている。そのなかでマスターズは、国際社会の構造に目を向けた議論として『人間・国家・戦争』を好意的に何度か引くのだが、しかし未開社会研究の知見を踏まえれば無政府的な状況においても法は存在するのだと説き、国際社会における法と秩序の存在をウォルツが軽視しすぎている点を批判している。そのうえで、マスターズがこの問題に関するより示唆的な議論として触れるのが誰のものかと言えば、ホフマンのものである。マスターズのこの論文の末尾は、ホブズ、ロック、ルソー、カントの洞察が国際社会理解をさらに深めてくれるであろうことを示唆して結ばれる。その際もやはり、示唆的な研究として挙げられるのはホフマンのルソー論であり、そこに並べられる形で参照するよう促されるのは、ウォルツの書いた——ルソー論ではなく——（公刊論文版の）カント論である³⁴⁾。マスターズが1960年代の終わり頃に著すルソーについての解説は、先立って現れたアルフレッド・コバンによる研究の第二版や、同時期に刊行されるジュディス・シュクラールのルソー解釈——自身の友人の手になるこの書を、晩年のホフマンはルソーの自由論に関して「最も説得的に精査したものの一つ」と称える³⁵⁾——と並んで、英語圏におけるルソー理解に長らく貢献していくこととなる³⁶⁾。対して、没価値的なアナキーの思想家としてのルソーは、それほど広範な支持を得られなかったように見える。

しかし、だとすると、なぜウォルツの構造的現実主義こそが後の国際関係論においては主流となったのか。一つには、この分野が古典的な思想家につ

34) Roger D. Masters, "World Politics as a Primitive Political System," *World Politics* 16(4), 1964, p. 609 esp. fn. 49 and p. 619.

35) Stanley Hoffmann, "Postface: Rousseau and Freedom," in *Rousseau and Freedom*, eds. Christie McDonald and Stanley Hoffmann, Cambridge University Press, 2010, p. 292.

36) マスターズがこの書でもホフマンを高く評価している点については、Roger D. Masters, *The Political Philosophy of Rousseau*, Princeton University Press, 1968, p. 372 fn. 71.

いての解釈には関心を払わなくなっていくという、しばしば指摘される背景があるのかもしれない。ただ、より適切にこの問いに答えるためには、構造的なものをめぐる国際政治的思惟の移ろいを広範に検討する必要があるだろう。そのような考察に踏み込む準備は、本稿にはない。ここでは差し当たり、状況の方が彼のテクストをつくりだしたという面は措いておき、ウォルツ一人をめぐって展開しうる仮説のみをとりあげることとする。具体的には、『人間・国家・戦争』と『国際政治の理論』の非/連続性についてもより込み入った考察が為されてよいのかもしれないという点に、若干の言及を行うにとどめたい。

通俗的な理解に従うと、『人間・国家・戦争』で三つのイメージ論を展開したウォルツは、そこでの議論を土台として『国際政治の理論』を著し、構造的現実主義を体系的に打ちだすに至ったとされる。この点については、ウォルツ自身、先の書が後の書の基礎になった点を回顧的に認めているところである (MSW ix/5)。ただ、そのうえで注意すべきは、このウォルツの論理展開が、学説史全体の流れと並行するもののようにして読まれてきたということである。つまり、人間本性を理論の核とした古典的現実主義から構造に焦点を当てたより社会科学的な現実主義へ、という転回がここに起こったというわけである³⁷⁾。

しかし、こうした図式化自体が、後づけ的な性格を帯びたものではある。『人間・国家・戦争』は『国際政治の理論』を予示する未成熟な著作として読まれるべきだというのは、それほど自明なことなのだろうか。『人間・国家・戦争』の主眼はあくまで三つのイメージを示すことに置かれていたものの、既存の研究がとりわけ第一イメージに（またいくらかは第二イメージに）偏っていたことから、第三イメージの重要性を強調する形になった——例えば、そうした側面もあったのではないかという推論は成り立つ。実際、そのうえで、第一イメージからの議論はいわゆる古典的現実主義者と行動主義者たち

37) Ashley J. Tellis, "Reconstructing Political Realism: The Long March to Scientific Theory," in *Roots of Realism*, ed. Benjamin Frankel, Frank Cass, 1996, pp. 67 ff.

に委ね、『対外政策と国内政治』では第二イメージからの分析を、『国際政治の理論』では第三イメージからの分析を自ら展開するというのが、その後のウォルツが試みたことだったようにも見える³⁸⁾。

とは言え、以上の点に関してウォルツの思考が連続的に発展していったにせよ非連続的に発展していったにせよ、本稿でも指摘したようなある種の非政治的傾向は、彼の論述においていずれにせよ一貫していたと思われる。そして、その点ではやはり、そうしたウォルツ的思考がなぜ台頭していったのかを理解するうえにおいて、国際政治的思惟をめぐるより大きな精神史の流れこそが、辿られる必要があるだろう。

〔付 記〕本稿は2021年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 に基づく研究の成果の一部である。

38) この点に関しては、『対外政策と国内政治』をとりあげた次の論考も参照。Michael C. Williams, “The Politics of Theory: Waltz, Realism and Democracy,” in *Realism and World Politics*.